

Welcome to Lake Yamanaka
The natural resort in the World.

山中湖

第三号

2005

季刊年4回 2000部発行

お問い合わせ先：FM山中湖編集室
E-Mail:bonjour@jasmine.ocn.ne.jp FAX:0555-62-1512

F M Ya ma na ka - ko

山中湖の歴史 (2) 探鳥地としての山中湖

探鳥地としての富士山麓の魅力については、多くの文献で紹介されているが、山中湖についてはどのように紹介されているであろうか。前号で紹介した松山資郎による記述(1985年)には、須走の紹介に加えて、「歸路は方向を變へて、再びバスを利用して、籠坂峠を越して山中湖畔に出で、此の邊りを視察して富士吉田に廻り、大月を経て中央線に出るのも興味あるコースであらう。山中湖畔には最近ホテルや都下の大學、高等学校等の寮が出来た。此等の建物が落葉松の間に散点する風景も逸し難いものであり、且つ此の地も、鳥の種類はさして多いとは申されぬが、その個體数の多いことでは決して須走村に劣らぬところである。殊に最近湖畔に出来た周遊道路を利用して平野村附近に至ると、數種の水邊の鳥の巢も見られる。又湖畔で浴みする可憐な鳥の姿を見ることも

出来るのである。」と山中湖を紹介している。戦前の昭和期は観光地あるいはリゾートとしての山中湖の黎明期から第1次開発拡大期にあたり、湖畔一周道路の完成など交通網が整備され、既に大学寮が進出していた当時の様子を伝える貴重な記録と言えよう。

また、須走におけるわが国初の探鳥会開催の翌年であり、前述の松山資郎による記述の翌年でもある、昭和10(1935)年には、東京鉄道局ジャパン・ツーリスト・ビューローと東京日日新聞社の主催による富士山麓自然科学列車の旅が開催された。中西悟堂が野鳥班を、平山修次郎が昆虫班を、牧野富太郎が植物班をそれぞれ担当し、特に野鳥班は一泊二日の行程で富士吉田、籠坂峠、須走、山中湖、忍野、富士吉田の順に野鳥観察を行っている。

昭和9(1934)年から10(1935)年にかけて行われた、わが国初の探鳥会および富士山麓自然科学列車の旅に関する記述から、富士山麓および山中湖の探鳥地としての魅力を若干ではあるが紹介できたのではないだろうか。さらに、日本野鳥の会会員だけでなく、新聞紙上の詩評(1934年)において折口信夫は「近頃「野鳥の會」といふ催しが屢々行われて、會員はその向き向きの観察を披露してみられる。」と紹介し、野鳥観察の人気を伝えている。こうした著名人による記述は探鳥、野鳥観察という活動を宣伝し、その普及に大きく貢献したと考えられる。また、それらの記述によつて探鳥、野鳥観察の活動が、当時どのように社会に受け容れられていたかを知ることができる。例えば、戦前の様子として、富士山麓須走の高田老人に探鳥の案内を依頼する人が多く、何組もの申込を断るほど探鳥がブームになっていたことなどである。更に、初期の頃の探鳥会において、特筆すべきは、探鳥会が地域との交流を生み出していたことにある。須走においては地域の名ガイドや拠点となった旅

館における人と人との交流を確認できる。山中湖においては探鳥という活動を通して、徳富蘇峰、経済クラブの別荘居住者、三島海雲などを登場させている。

探鳥地山中湖の誕生は中西悟堂をはじめとする日本野鳥の会会員の手によつて富士山麓の魅力が紹介されたことによるところが大きく、実際の探鳥会の中に見られる来訪者と地域との交流の中に誕生時の豊かな歴史の膨らみを見ることが出来る。

現在、富士山麓ではエコツアーズを含め野外レクリエーション活動が隆盛であるが、その一つとして、山中湖において野鳥観察会が開催されることは、歴史的な経緯の中にある必然性を持っているようにも思える。また、最後に、富士山麓は歴史的に野外鳥類学ともいふべきフィールド学が再生した地域であることにも注視すべきことを付記しておきたい。

山本(2005.3.11記)



山中湖で行われた水鳥の観察会(平成15年12月14日)

誤植の訂正とお詫び

既刊の紙面において誤植がありましたので、訂正するとともに、ここにお詫び申し上げます。

- 第一号 P.1 第1段 13行目「以来」→「依頼」
- 第二号 P.1 第1段 6行目「旭ヶ丘」→「旭日丘」
- 同 第3段 15行目「晴彦」→「春彦」

FM山中湖では
広告を募集
しております。



広告募集!

観光

空を見ると六本木ヒルズの上をドイツ製のツェペリン・ニューテックノロジ飛行船がゆっくりと旋回している。「日本におけるドイツ年」のために7年前にツェペリン飛行船が霞ヶ浦に飛来したルートを辿って日本に来るはずであった。はずであった、というのは予定が少し狂ったのである。昨年の6月にドイツのボーデン湖(コンスタンツ湖)を飛び立って、ドイツやフランスの世界文化遺産を撮影したのは計画通りだったが、ロシアを横断し8月下旬に日本に着く予定が、テロを理由にどうも不明だが、ロシア上空を飛ぶことが不可能になり急遽船で運ばれてきた。おかげで霞ヶ浦における式典は半年も遅れて今年の2月5日とずれ込んでしまった。寒い中出席した式典では、土浦市や茨城県はさかんに飛行船を町おこしの起爆剤にと盛り上がりがあった。

新世代の飛行船はツェペリン伯の生まれ故郷である南ドイツのボーデン湖の町コンスタンツの対岸のフリードリッヒスハーフェンで製造されている。全長75mの14人乗りでボーデン湖上の観光遊覧飛行は数年前から行われていて、高い料金にもかかわらず今でもかなり先まで予約で一杯である。日本からの予約客もあるそうだが、この飛行船を日本郵船が一隻買

取ったのである。

飛行船には「コンカミノルタの宣伝以外に「ようこそ日本 Visit Japan」、「愛地球博」それに「日本におけるドイツ年」の三つのロゴが付いている。「ようこそ日本」は外国人観光客誘致に力を入れなければいけない、とやと重い腰をあげた日本政府のスローガンである。訪日外国人の少なさに危機感を抱き観光の持つソフトパワーをやっと認識したためである。「愛知万博」は地方活性化のシンボルだ。

「日本におけるドイツ年」は日本人にドイツをよりよく理解してもらい、交流と貿易を拡大しようというドイツ政府の意図である。重点は、昔のイメージのドイツではなく今日のドイツを知ってもらいたい、現在のドイツのライフスタイル、デザイン、ファッション、商品、観光を知ってもらい、そして経済促進をという願いがこめられている。飛行船の船腹にある三つのロゴを見ると、観光による経済活性化や観光のソフトパワーという背景が魚見とれる。飛行船を眺めながら「観光」とは何なのか、思いをめぐらした。

観光の語源は中国の易経に「国の光を観るはもって王の賓たるによるし」に由来する。国の光るもの(文化、風光、制度など)を観るのは国王の賓客

としてふさわしい、役に立つ、ということだそう。国際的な言葉であるし、観光客は王賓客にふさわしくなくてはいけないという、観光客の自覚も促す内容であり、私の好きな言葉だ。語源は観光ビジネスに従事する人には現在でも基本になりうる言葉だと思う。

観光の定義は「自由時間における日常生活圏外への移動をともなった生活変化に対する欲求から生ずる一連の行動」ということになっているが、定義というのはいつもつまらない。だからどうだ、という感じだ。易経の語源の方が実際には役に立つ。定義から外れて観光とは何かについては様々な解釈や意見があつて面白い。いくつか印象的な説のトップにくるのは、現代の団体旅行の祖トマス・クックの言葉である。観光とは「よく知られたものの発見」と単刀直入だ。1841年に鉄道をチャーターして団体旅行を考案したクックは、のちに全世界の旅行を手がけるようになり、ホテルから両替、ガイドブック出版など今日の観光事業の基を築いた創始者である。なるほど領ける言葉である。観光ビジネスは160年前でも観光地のPRが最重要と明言している。

ジョン・アーリー著「観光のまなざし」によれば「観光とは、異郷にあつてよく知られたものを少し垣間見るサービスの売買」というのだ。富士五湖を訪れる観光客にこの定義を当てはめてみるとどうだろうか。湖を前に崇高な姿の富士山を垣間見させて、ぶどう酒、ほうとう、桃などの山梨イメージをすこし触れさせて、知っていることを再確認させるサービスということだろうか。観光ビジネスは広報宣伝無くしてあり得ない、という基本を表わしている。

しかし知っているものを垣間見るだけで観光が終わっては寂しい。観光によつて安らぎや感動が得られることは、知られたものを再認知するだけでは得られない。観光は社会を包むあらゆる環境を映すものだから、観光の解釈も千差万別である。

旅行産業の究極的目的は「感動の創出」なのだ、と説く人がいる。観光の基本的役割は交流であり、効果として経済効果や文化的役割がある、と説く人もいる。きれいな過ぎていて現実の経済との関連が薄らい感じ

私が好きな観光に対する名言は「観光は自然の美、人工の美、人情の美を提供するサービス」である。この三拍子の資源がそろって、加えて広報宣伝が行き届けば鬼に金棒である。山中湖には世界有数の自然の美がある。人工の美については、整備された公園や博物館、湖畔のプロムナードなどが一部あるが、町並みや建造物の保存については感心しないし、湖畔の業者のバラックや騒音、浜辺の汚れは景観破壊のマイナスである。人情の美については未だ接点がないので何ともいえない。三拍子プラス広報という難しい課題処理が急務である。

坂田(2005:4,26)



www6.ocn.ne.jp/~win

Big Year! 2004

梅雨時期の少雨、夏の猛暑…異常と思えた昨年の気候に例年のない質の良い醸造用葡萄は収穫されました。当たり年といわれる2004年のワインは新酒の出荷を経てそろそろ顔を見せ始めています。自然の偶然が育てた、美味しい山梨の実りを

山中湖畔明神前交差点東へ二百米

Wine Shop ふじたや 山中店

森の寺子屋

再生すればまだまだ、取り戻せる

「地球にやさしい」「他人を思いやる心」、私たちは一人で生きていけないはず。自然や隣人と「もちもたれつ」して生きてきたはずが、バランスを崩し片方上がりの世の中にならてきた今、「再生」という言葉を盛んに聞くようになってきた。修理すればまだまだ使えるようになる。山も川も、人間も生き生きとした元気な姿を取り戻せるはず。

「森の寺子屋」は無名ながら誠実で、まじめで、損得を超えて

地域に元気を取り戻せ！

平成17年4月20日山
中湖情報創造館会議室
にて行われた第一回「森
の寺子屋」は口伝えによ
る開催告知にもかかわらず
ほぼ満席の中、開
校の呼び掛け人・工藤
氏より山中湖村の「年
を追うごとに元気の無

くなる現状」と「全国各
地ですぐに運動を起こ
し、成功に導いた人の話
を聴くこと」によって皆さ
んに刺激を与えるお手
伝いをしたい」との挨拶
の後、日本中の地域起
こしを「束ねている」菅
原氏の紹介が始まった。



穏やかな講演に聞き入る参加者
会場：山中湖情報創造館

「村おこし」「地域づくり」に取り組んでいる全国の講師を
招き、その苦心と成功に至るまでのドキュメントを語って
いただく教室です。講師の熱いエネルギーを吸収し、自分
何が出来たのかを考え、自ら行動を起こす：そんな思い
で「森の巣ギャラリー」のオーナー・工藤氏の呼びかけによ
って開校しました。

第一回の講師には全国に250を超える村・町や地域振
興に取り組む支局長からの最新情報と活動報告が紙面
をにぎわす情報誌「かがり火」の発行人・菅原欽一氏が登
場。噛めば噛むほどジワッと味が出る氏の語り会場は：

芸能記者からスタート
した氏の社会人生活を、
自身の穏やかで包み込
むような語り口で紹介
しながら、とても穏やか
かに講演らしからぬ「か
たり」が会場に伝わった。

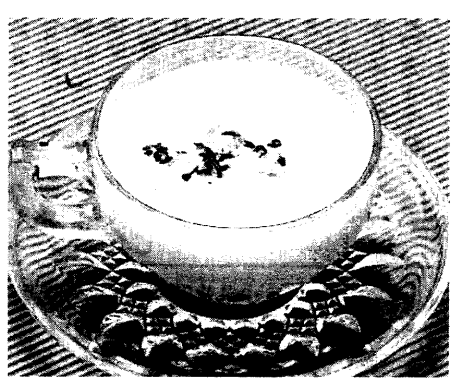
「かたり」はこれまでの
生活の中で都市と地
方、それぞれの「地域の
力」「地域の魅力」から、
氏が発行人を務める
「かがり火」発行を思い
立つときの思いへと移っ
ていった。それは、行政やシ
ンクタンクが創り上げて
いる様に見える地域の様
でも、結局は一人一人
の「人間」のエネルギーで
あることが多く、出来上
がった時、胸に造花をつ
けて挨拶をする「有名人」
ではなく、現実に地域
を動かしているのは「無
名の人間」「働く人間」
であり、そういう人がい
る社会や地域、「無名の
人間」なだけけれど、自
分の街に愛着があり、
そこで死んでいこうとい
う人を追いかけよう。と

芸能記者からスタート
した氏の社会人生活を、
自身の穏やかで包み込
むような語り口で紹介
しながら、とても穏やか
かに講演らしからぬ「か
たり」が会場に伝わった。

言う思いから「かがり火」
は創刊されその後、街づ
くりを考える多くの人達
に支持されるに至る話へと
移った。そして街づくりは
単一の問題ではなく、と
ても多くの要素が絡み合
うこと。そして現在国内
では個々の街の地域格差
がますます開いてきてお
り、これは地域住民の格
差もさることながら行政
間格差も大きな要因とし
てその差はますます広が
っていつていること。そし
て行政を動かせる最も重
要なことは「やる気のある
住民」の存在であり、反応
のいい街だ。...

作り方

- ① 鍋にバターを溶かし、にんにくを炒め、香りが出たら玉ねぎ、ニンジン、セロリの薄切りを入れ、色づかないようにゆっくりと炒め、さらにじゃがいもを加える。
- ② じゃがいもがしんなりしてきたら小麦粉をふり入れて1~2分炒め、しじみの煮汁を加えて、木じゃくしで底をこすり落とす。煮立ってきたら塩、こしょうで味をつけ、弱火で15~20分煮る。
- ③ ②のあら熱をとってミキサーにかけ、鍋にもどしてやや濃いめに塩味で整える。これをボールに入れて冷蔵庫で冷やす。
- ④ ③に牛乳、生クリームを混ぜる。よく冷やしてスープ皿に盛り、しじみの身とパセリをふる。



材料(4~5人分)

- | | |
|-------------|----------------|
| しじみ・・・400g | にんにく・・・1かけ |
| 水・・・2カップ | バター・・・20g |
| じゃがいも・・・中1ケ | 小麦粉・・・大さじ1 |
| 玉ねぎ・・・大1/2ケ | 牛乳・・・1カップ |
| ニンジン・・・1/2本 | 生クリーム・・・1/2カップ |
| セロリ・・・10g | 塩・胡椒・パセリ・・・少々 |



TEKE・TEKE・COOKING しじみの冷製クリームスープ

先日、友人・子供たちと自転車山中湖を一
周した。入梅間際のわずかな晴れ間がのぞいた
週末の午後。肌をかすめる爽やかな風。鼻をくすぐる新緑
の芳しい臭い。嫁いで14年、初めて自転車山中湖を走った。
自然に包まれ、山中湖を身近に感じて子供たちが、いやむ
しう大人たちがこの時間を堪能していた。
軽い運動で爽やかな汗を掻いたとき：そんなときはさっ
ぱりとした味わいなのに栄養満点の「しじみの冷製クリーム
スープ」はいいかが？

みなさんご存じのように、たばこを吸うと肺がんやその他の様々な病気になりやすいといわれています。ではいったいどれくらいなりやすいのでしょうか？表はがんになりやすさの指標が臓器別に上位10位まで男女別に記されています。男女とも肺がんは第2位で、男性では4.45倍、女性では2.34倍、非喫煙者より喫煙者の方が肺がんになりやすいという意味です。

また喫煙は本人だけでなく、周りの人間にも影響を及ぼします。喫煙している人から出る煙には2種類あり、たばこ先端からの煙(副流煙)とはき出すときの煙(呼出煙)で、2つをあわせてものを周りの人が吸い込む状態を受動喫煙と言います。受動喫煙の肺がんに対する影響を見るために、夫婦間での喫煙に注目したデータがあります。

肺がんの話

概算ですが、妻の立場からみて、夫婦とも非喫煙者の妻よりも、受動喫煙で2倍、本人が喫煙者の場合4倍、肺がんが死亡する確率が高くなるというものです。

では、肺がんとはいったいどういう性質を持つものなのでしょう？肺がんは2大特徴があります。まず一つは、周りの正常組織を溶かしながら大きくなる点。肺がんは肺表面を突き破ると隣接した臓器(肋骨、筋肉、心臓など)に拡がっていきます。もう一つは、転移をする点。脳、肝臓、全身の骨に高頻度で転移を起し、所謂全身にがんが広がる状態になります。肺がんには、この二つの特徴があり、それが故に悪性とされます。

男性		女性	
喉頭がん	32.5	喉頭がん	3.29
肺がん	4.45	肺がん	2.34
咽頭がん	3.29	膀胱がん	2.29
口腔がん	2.85	甲状腺がん	1.85
食道がん	2.24	食道がん	1.75
全部位のがん	1.65	肝臓がん	1.65
膀胱がん	1.63	子宮頸がん	1.57
膵臓がん	1.56	膵臓がん	1.44
肝臓がん	1.5	口腔がん	1.4
胃がん	1.45	全部位のがん	1.32

表. 男女別の喫煙者の各種がんの相対危険度

肺がんが出来た場所だけにとどまっているか、もしくはその場所の近くにも転移があっても取りきれないと考えられた場合は手術が、それ以外の場所にも転移があるか取りきれないと判断された場合は放射線や化学療法との組み合わせが選択されます。

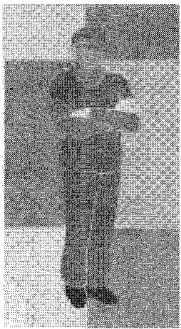
手術をしたのに、その後、他の場所に再発する事があります。これは、肺がんが手術前に、その場所ですでに転移を起していたと考えられます。肺がん手術前に全身の転移検査をするのですが、小さい転移巣はどのような検査でも発見出来ないのです。

近年、肺がんの治療薬としてイレッサという飲み薬が注目されています。特に、非喫煙者、女性、腺癌の再発もしくは手術の出来ない方に腫瘍縮小効果が期待出来ます。しかし残念ながら致命的な合併症が出る事があり、また効果がなくなる患者さんもいらっしゃいます。最近ではこの薬が効かなくなる理由の一部もわかってきました。まだまだわからない点が多いのですが、この薬を通して、肺がんの医学は確実に進歩したと思えます。

自己紹介

私は学生の頃山中寮にお世話になり、平成元年千葉大学医学部を卒業しました。専門は呼吸器外科で、主に肺がん、嚢胞性肺疾患、縦隔腫瘍等の治療に携わっています。平成13年10月から2年間、肺がんの基礎研究をするためにアメリカのグラスに留学する機会をいただきました。ごく限られた知見ですが、肺がんの手術治療に関する限り、日本の医療はまちがいないくアメリカと同等以上だと感じました。

また実験中の事で忘れられないコマを紹介します。私が、肺がん細胞にある薬剤を投与した前後のグラフを指し示しながら、「このように違いがあるのだが、思ったほど劇的には変化していかない」とボスに説明すると、「ノー、ノー、ノー」と3回連呼した後「変化があることこそ重要なのだ、この研究は非常に大事なのだ」と力説しました。この言葉があつて、最後までその研究を続ける事が出来ました。今後毎日進歩の医学についていこう努力していかなければいけないと考えています。



千葉大学医学部付属病院 呼吸器外科 鈴木 実

あとがき 観光産業

山中湖に暮らす私たちにはこれから何で食べていくのでしょうか？日本にとって重要で新しい産業というところやバイオなどの先端産業ばかりが取り上げられますが果たして観光産業は重要な産業と見なされないのでしょうか？国内のアンケート調査で「老後の楽しみは？」という質問に対する回答の第一位は圧倒的に「旅行」です。国内では直接間接を合わせて国民の約6%が観光産業に従事しているといわれます。しかしアメリカではこの2倍の人が、ヨーロッパの主な国でも10%以上の人が観光産業に携わっています。山中湖には観光資源は無いのでしょうか？私たちはモノづくりにばかり熱中していませんか？山中湖はこれまで本当の意味で観光というものを経営的産業として位置づけてこなかったのではないのでしょうか？ある専門家の説に、世界の歴史の中では約50年周期で観光ブームが訪れているそうです。2000年イギリスが世界の海を支配していた時代。2000年アメリカが世界最大のGDP大国になったタイタニックの時代。2000年代ジャンボジェット就航の時代。そして2010年まであとわずか：高齢化の進む先進工業国、豊かになるアジアの国々、複雑になる社会生活の中での安らぎの必要性：山中湖に暮らす私たちはどこに目を向けなければいいのでしょうか？

●2005年6月10日発行 ●季刊年4回発行 ●第三号

- 発行人/編集人 高村 達也
- 編集アドバイザー 齊藤 崇年 (KDDI)
- Special Thanks 山本 清龍 (東京大学)
- 坂田 史男 (ドイツ観光局)
- 鈴木 実 (千葉大学医学部OB)
- 工藤 博幸 (森の巣ギャラリー)
- 高村 安浩

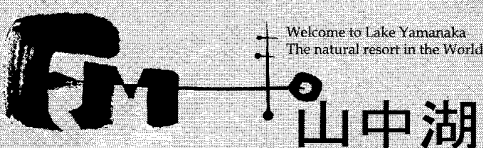
●F M 山中湖編集室 山梨県山中湖村山中9 9

Mail: bonjour@jasmine.ocn.ne.jp FAX: 0555-62-1512

http://www.fujitaya.org/fmyamanakako/index.htm

(バックナンバーはこちらのページからご覧いただけます)

※ このミニコミ紙に掲載する記事&広告を募集しております。お問い合わせは上記編集室までEメール、FAXまたは郵便にてお願い致します。



FM Ya ma na ka - ko

Welcome to Lake Yamanaka
The natural resort in the World